

離したる者は杖六十の罰を加ふ但し加害直後の復讐は之を罰せずと云ふ極めて糊塗的な條文を見るのみである。

是を史實にとるに或は無罪とせられ或は有罪とせられ死刑に處せられた者も少くないのである。是を有名なる政治家の意見に徴するに陳子昂は復讐者は殺人の罪に依り之を死刑に處し以て國法を正し、死後之を表彰して以て禮教を明にすべしと論じ、柳宗元は之を駁して誅戮と旌表は一致すべくもない、若し父、法に依らずして誅せられたるならば復讐するのは當然であり死刑とすべき理由なく父が法に従つて誅せられたならば復讐すべき理由なく旌表す可くもないと論じてゐる。更に韓愈は事件發生の都度群臣相議して處置すべく法律を以て斷じ難しとし、更に王安石は亂世治世に於て其事情異なる、復讐せざるは不孝なるも、復讐して祀を殄つても亦孝に非ず、寧ろ復讐の義務を忘れず而も復讐を阻止する天意に従ふこそ唯一の解決策であらうと論じてゐる。かくして吾人は以上の考究に依つて、一思想の爲に生命を犠牲とするとも厭はざる高き倫理觀と、倫理的にして而も違法たるものに對

する熾烈なる國家感情との葛藤は遂に解かる可くも無かつたとの結論に達するのである」と。

かゝる方面に關する歐米學者の所究は極めて僅少であつて、從來 O. Franke, A. Vissière 氏等の數著あるのみである。論中復讐律を清に始るとなしてゐるに就ては疑義ありと思惟するが、是勿論本論文の要旨に影響ある事柄ではない。東洋思想史に興味ある人々の一讀を冀む。

二十四頁 (Zeitschrift d. Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, Band 10: Heft 1/2. Leipzig 1931) [以上内田]

● 日本文化史序説

文學博士 西田直二郎著

「歴史は生活から分離してあるべきでなく、現在から時の隔りによつて隔絶せるものでない。」——歴史に就いてのかやうな反省は今日多少ともその事に心を寄せるもの間に殆ど常識といはんまでに一般的な見解となつてゐるにも拘はらず。我々は果して何れの歴史に於いて真に

かくの如き言葉の正しき意味を思はせられるが如きに接しうるであらう。歴史に就いて語られること現代の如く匪なるはなく、然も眞に生命に満ちた時代の歴史を有せぬことまた現代の如きも少い。蓋し歴史に就いて論ずるものは歴史を知ること少く歴史の研究に従ふものは

なほ自己の爲すところに就いて 分なる反省を缺くものあるが爲ではなからうか。眞に我々の時代の歴史の出現の爲には歴史的世界の體驗に於いて最も廣く且つ確に然も自らその意味を反省するに於いて最も深き歴史家を俟たねばならぬ。今、西田博士の新著日本文化史序説を手にして我々は始めてかの如き要望の満たされたことを思ふ。——この書に於いて最も著しいことは何よりもまづ、その目的とする二つの部分、文化史の性質を考へること、日本文化の展開を観ること、に正しく一にあることである。即ちその文化史に就いての論議は著者が二十幾年に亘る長き研究生活の切實なる反省に基くものであり、その日本文化史の叙説はその歴史論に必然なる結果である。卷頭に掲げられた歴史學の性質論とその本文

に云ふところが全然別個であり、時に屢々全く相反するが如き、我々が普通の從來の歴史書に見馴れ來つた缺陷はこゝには完全に除かれてゐる。然らばそのことから來るものは何であるか。

第一には、本書が從來の歴史が猶多少とも何等かの形に於いて残してゐた所の歴史の摸寫説の立場を完全に離脱してゐることである。歴史家を離れて永久不變に時の幕の彼方に存在する歴史事實への信仰が如何に眞の歴史の理解に遠いものであるかは今更言ふまでもない、寧ろこのことは却つて歴史家の立場とその方法を明確に意識した新しき歴史學に於いて往々その立場そのもの、固定と一面性との故に、即所謂現代を固定せる單一なるものとして考へるに於いて、實は同じものを有つてゐるに思ひ合はざるべきである。孰れに於いても歴史は要するにピントグラスに映れる影像の如くに平板なるを出でないであらう。然るにこの書に就いては歴史はそのあらゆる斷面に於いてその姿を呈露し逆に複雑多様な現代の意識は著者の人格識見を通して實に屈折多く歴史の中に

滲透してゐる。人はそこに眞に歴史と歴史家とが、過去と現代とが、互に相 durchdringen してゐるのを見るであらう。

第二は、第一の點より必然に來ることであるが歴史が分秒の前後をもその序列を變へることの出來ぬ時間の軸に固着せるものとする立場より自由であることである。

著者は歴史に於いては時間も亦意味に過ぎぬことを明言し従つてその時代を考ふるに於いても常に極めて自由なる立場に立つてゐる。鎌倉時代に就いて古代精神の再生を言ふとき、それはまづ鎌倉時代なる一時期があつてそこに古代の氏族制度的精神が再生し來るといふのではなくして、古代の生活の復活に於いて却つて鎌倉時代が成立する、鎌倉時代に於いて古代が見られると共に古代に於いて鎌倉時代が理解されるのである。

第三は所謂對象若くは内容の問題である、即ち文化史なるものに於いては他の諸々の歴史とは異つた特定の對象或は内容を有するべきものとする考への否定である。特に日本文化史を言ふとき、ある國家觀念、家族制度、

神道、大和繪、茶道等々のみがある内容になすのではないといふこと逆に日本の一切の歴史事實の中に内在する普遍人間的なるもの、人間生活の眞實なるものが明らからるべきであること、従つて日本史の理解がやがて世界史の理解でもあることが明にされてゐる。人はそれによつて日本に於ける封建制度や資本主義の成立事情を西歐に於けるそれに比較することの眞の意味をも解することが出来るであらう。

以上一應本書の有する最も著しい二三の點を擧げた。然も固り決してかくの如きに盡くるものではない。簡勁にして含蓄の多い博士の行文は一言一句皆多年研鑽思索の結果を凝集せるに似て匆遑たる一讀のよくその全意を諒悉するに難く、況んや非才自ら揣りずして濫に紹介の辭を敢てし或は甚しく誤傳へてその眞價を傷くるなきやを偏に畏れる。要はたゞ本誌上にこの大いなる書の出現を告げてその喜びを瀆たんとするのみ。想へばこの書の世に出づるを待つことも久しかつた。大正十三年夏始めてその機縁を與へられてより既に七年有半今漸くその一

本を手にするを得て、それを巡る種々回想の私情を除くもなほ幾多の感なきを得ない。新しき歴史は遂に誕生したのである。こゝに始めて正しく確なる指針を與へられたこの國の文化史研究のこの後愈昌んらんことを。(菊版本文六四五頁、圖版一〇葉、東京改造社發行、定價五・〇〇)〔柴田〕

● 日本古印刷文化史 木宮 泰彦著

著者は日支交渉の歴史研究家として名ある人、適々文部省の精神科學研究費を得て豫てより企てた五山版以下唐様系統の版本調査を始め、以て留學生將來の支那文化究明の一端をなさんとした。爾來刻苦精勵數年にしてなつたのが本書である。

篇を分つて六、印刷創始期たる奈良朝より、印刷の興隆する平安朝時代、和様版隆盛の鎌倉時代、唐様版隆盛顯著なる南北朝、兩版共に衰微する室町時代を経て江戸時代の初期活版が興隆する迄の歴史を跡づけ、それが如何に時代文化の消長、特に日支交通、佛教文化の隆頽に

關はるところ甚大であるかを論じてゐる。蓋し本書が印刷文化史と題せられる所以である。

丹念なる資料の蒐集は廣く和漢の書に及び、現存の古版を求めては各地の社寺、文庫を歴訪し、周到なる注意を以て、これ等を或は表示し或は年月を追つて編み一見して了解し易からしめてゐる。その間先人の研究、俗説通説をあまねく挙げ、これを史實に徴して検討し、而も常に疑を疑として存するの用意が窺はれる。

所謂愛書家、好事家の反省を促すこと大いなるは勿論古刻書史學上貴重なる資料を提供するものであり、日支交通史を補足し佛教文化研究を助け、更には一般歴史研究にも亦資するところ少くないであらう。疑の存するところを明示せる點は、著者の研究の發展を期待せしめ、有志の後繼者に對して、論究の領域を指示するものと云へる。

各時代各系統の版本の中基本的なるもの六十を選び、コロタイプ圖版として挿入し、著者の研究の便宜上編纂した古刻書題跋五百五十八を附録に集録し、本書記載古刻